別紙２

論文審査の結果の要旨

氏名：堀井　優

本論文は、東地中海におけるイスラーム・ヨーロッパ間の貿易秩序につき、その一大転換点である15世紀末から16世紀中葉におけるマムルーク朝・オスマン朝とヴェネツィアとの関係を中心に、アラビア語・オスマン語・イタリア語の原史料を用い検討した論考である。

序章では、ヨーロッパ=キリスト教世界と中東イスラーム世界との間の貿易の制度的枠組みを、シャリーア（イスラーム法）の原則に遡り論じ、ついで論文全体の構成を明らかとする。

第１章では、まず16世紀前半に確立するオスマン条約体制の特質とその発展過程を、オスマン・ヴェネツィア間条約のオスマン語テキストを包括的に用いて検討する。その結果、この時期を通じオスマン朝の地中海における勢力拡大とともに、一方で海上におけるオスマン朝の主導権が強まり、ヴェネツィアに対する規制が増大したこと、他方でオスマン領内においてはヴェネツィア人の権利が拡大したこと、そして海上秩序・居留条件の両面において、多様化と精緻化が進んだことが示される。

第２章・第３章においては、東地中海の重要貿易拠点の一つたるエジプトのアレクサンドリアを取り上げ、マムルーク朝からオスマン朝へと支配者が移行する中で、貿易秩序がいかに変容していったかを、サヌートの『日記』を中心とするヴェネツィア史料とアラビア語・オスマン語史料を用いつつ分析する。

まず、第２章では、マムルーク朝下の海港支配制度とヴェネツィア居留民の活動を検討し、マムルーク朝末期に入り、財政上、胡椒の強制購入制度が採られ強化されていったことが、ポルトガルのインド洋進出による香料の着荷の減少と相まって、マムルーク朝・ヴェネツィア間の貿易が停滞していったことが明らかとされる。

ついで、第３章では、1517年のエジプト征服以降、オスマン朝下のエジプト支配の体制が、いかなる形を取っていったか、そしてその下でヴェネツィア居留民の活動がいかに変化したかを、アラビア語・オスマン語・イタリア語の原史料に即しつつ検討する。そして、オスマン朝支配下のエジプトでは、基本的に自由貿易政策が取られ、財政的には関税収入に重点がおかれたこと、この政策下でヴェネツィアとの貿易も活発化したが、同時に、関税の徴税請負人として活躍するようになったユダヤ教徒が貿易に関しても台頭し、ヴェネツィア人の活動の障害となったこと、そしてこれも一因としてヴェネツィア人は、貿易活動の場を、アレクサンドリアからエジプトの中心都市カイロへと移していっ

たことが明らかとされる。

結論においては、このようにして成立してきた東地中海貿易秩序が、近世オスマン条約体制からいかにして近代キャピチュレーション体制へと変容していくか、また東地中海における貿易のあり方がいかにして伝統的レヴァント貿易から近代国際貿易へと変化していくかにつき、ヴェネツィア人の貿易活動に即した研究がいまだ存在しないことを指摘し、今後の研究構想を提示する。

以下は評価であるが、東地中海における異文化間交易の歴史を、その一大転換点である15世紀末・16世紀前半に焦点を絞り、マムルーク朝・オスマン朝とヴェネツィアとの貿易体制の面から、三言語の原史料を博捜精査して、分析した研究であり、この種の研究として本邦では最初の体系的研究であり、国際的にも先駆的業績といえる。

とりわけ、ヴェネツィアとマムルーク朝、ヴェネツィアとオスマン朝との条約の内容について包括的に分析を加えていることは、キャピチュレーション論の理解にとっても基本的な貢献といえる。

そしてまた、条約体制と海港制度と居留民の活動の実態を、エジプトの海港都市アレクサンドリアの例を取り上げ、史料に即しつつ分析を試みた点は、本邦はもとより海外においても先例のほとんどない先端的研究として評価しうる。

しかしながら、また本論文にもいくつかの欠点が存在している。

まず、本論文の基本テーマは、東地中海における貿易秩序のあり方の全体像の把握にあるとされるにもかかわらず、専らヴェネツィアに重点が置かれ、ヴェネツィア人と他のさまざまな交易に携わる集団との相対的な位置関係が必ずしも明らかとされていない。

また、居留民と現地社会との法的訴訟問題を扱うに際し、マムルーク朝では頻繁に見られるヴェネツィア人とムスリムとの訴訟についての規定が、オスマン朝においてなぜ欠けているのかについて十分に説明がなされていない。

さらに、オスマン朝の台頭の過程で一方で海上におけるヴェネツィア人の活動へのオスマン側の規制が強まり、他方でオスマン領内におけるヴェネツィア人の行動の規制は緩和されていったと論じているが、一見相反しているこの二つの現象の関係を必ずしも十分には論証できていない。

しかしながら、結論として、このような若干の欠点は、本論文の先駆的な先端研究としての価値を決して損なうものではない。15世紀末から16世紀中葉にかけての東地中海の貿易秩序について、アラビア語・オスマン語・イタリア語の原史料を駆使して体系的に考察した本論文は、イスラーム史・地中海世界史・異文化間交易史の研究に大きく貢献したものと認められる。したがって本論文は、博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと評価できる。